

---

# 予言と運命の詩 炎の章

沖田 光海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

予言と運命の詩 炎の章

### 【Zコード】

Z6335U

### 【作者名】

沖田 光海

### 【あらすじ】

予言と運命の詩 光の章 より、10年前……アーケが大戦に勝利し、英雄と褒め称えられる少し前から、物語が始まる。

一人の青年、アーケは兵士である祖父に呼び出され、帝都へ足を運ぶ。

そこで一人の不思議な少女 玲に会い、彼の運命がかわる。

若き日のラメドメンバーたちに、どつかれながら、アーケは果たして、英雄になることができるのだろうか？

毎日毎日未来の大将軍ファイアールと喧嘩しながらも、本当に世界を救えるのか！？

## 登場人物&物語紹介

年号 第52歴 35年

登場人物

アーク＝レー・シユ

名前 アーク

姓 レー・シユ

年齢 17

性別 男

Data

炎の民の末裔である青年。 困った人は放つておけない性格。 なかなかの熱血漢で少しバカっぽい性格ではあるが、頭が悪いわけではなく、人より数倍敏い。

元々は小さな村で自警団をしていたが、その腕を見込まれてラメドの長老である祖父ラウ＝レー・シユの勧めで帝都へ来た。

霧亞 玲

名前 レイ

姓 キリア

年齢 15

性別 女

Data

純血のコフ。 それ故に周りから差別を受けて暮らしてきた。 右目が藍、左目が赤紫色の瞳を持つ。 小柄で美しい顔立ちの少女。 強い力を持ちながらも、人を傷つけることを嫌う。 なりゆきでアークとともに行動することとなつた。

フィアール＝リクロード

名前 フィアール  
姓 リクロード  
年齢 24  
性別 男  
Data

氷の魔女の末裔。冷氣を自在に操る。アークと仲が悪く、よく衝突する。冷静な性格の反面マイペースな一面も持ち、空気を読めない（読まない）ことも……

戦後の焼け野原で拾った記憶喪失の少年セファイルを実の息子のように育てている。

セファイル

名前 セファイル  
姓 ???  
年齢 12歳  
性別 男  
Data

右目が赤紫、左目が紫紺のオッドアイを持つ記憶喪失の少年。フィアールのことを心の底から慕っている。

フォンル＝リクロード

名前 フォンル  
姓 リクロード  
年齢 15歳  
性別 男  
Data

フィアールの弟。後方支援を主に闘つ。おつとりした性格で軍人に似合わない。

サラ＝フロン

名前

サラ

姓

フロン

年齢

17歳

性別

女

Data

治癒術と攻撃術を扱う女性。異種族に対して偏見が全くと言っていいほどない。

レントに気がある様子

レント＝サフィラン

名前

レント

姓

サフィラン

年齢

19

性別

男

Data

鋭い刃を使った一撃必殺の技を得意とする。  
基本的に無表情で、感情が出ない。

## プロローグ

いつか、大きなことを成し遂げたいと思っていたが、正直そんなことはできるわけがない。

成功する奴なんてほんの一部ってことはわかっている。

でも男ならだれでも憧れるんだ。

世界を救つて、英雄と呼ばれて、そして歴史に名を残す。

そんな御伽噺おとぎばなしみたいな、夢

だからかな。

じいちゃんに、兵士として帝都へ来ないかと誘われた時、正直うれしかった

今は、異種族とニンゲンの間で戦争真っ最中。

なんでも、コフとか言つ変な種族が反旗を翻して俺たちに牙をむいたらしい。

帝都の軍の兵士が足りないとかで、おれも駆り出されることになつたわけだ。

ここで名をあげれば俺も、歴史に名を残すような大物になれるだろうか？

そんな淡い期待を抱きながら。

## 第壹幕 少女との出会い

アークは生まれてはじめてきた帝都に驚きを隠せなかつた。

「へえ～、ここが帝都か……」

きょろきょろとあたりを見回していると一人の少女がアークにぶつかつた

「ご、ごめんなさい！」

フードを口深にかぶつた少女はあわててアークに謝ると、サッと走つて行つた。

「なんだつたんだ一体？」

少女の走つていった方向を見ると、後ろから複数の人間が走つてくる音がした。

「あいつ、一体どこに行きやがつた！」

「所詮子供の足、そう遠くへは行かないだろ」

「だが、すばしっこいガキだからな、どこへ行つたかわからねえ。」

「一応ここいらをもう一度探すぞ！」

野太い男たちがアークのそばを通り抜け、走つていった。

「何なんだ？ 一体？？」

どうやら、あの少女を追つているらしかつた。

あの男たちの様子からすると、少女が何かをして彼らを怒らせたらしきが……。

「物騒な世の中だし、すりか何かかな？」

だが、さつき少女とぶつかった自分は何も取られていない。

「なんだろうな～、ねえ、君は解る？」

アークは数歩歩いた先の路地裏の気配へと話しかけた

『…………』

「あいつらは、うまくまいたみたいだけど、俺、君が回り道してここに戻つて、そこに隠れるのを見ちやつたんだよね。」

『…………』

「怖い」とはしないからさ。何か話してくれない？」

『……』

しばらく2人の間に沈黙が流れた。

「本当に、何もしないよね？」

おずおずといつた様子で少女は姿を現した。

相変わらず、黒いマントのフードはかぶったまま。顔が見えない。背はアークより頭一つ分低く、マントの端から見える手足は驚くほど白かった

「君、一体なんでそんな風に顔を隠しているの？」

「それは……」

「……？」

「……か、顔に醜いやけどを負って、それで……」

せつと、少女は視線をそらした。

どうやら嘘をついてるらしいが、アークは気にせず、次の質問を言った

「何で追いかけられていたの？」

「……」

「何か悪いことでも、した？」

「していないわ！」

少女はきっぱりといった。

「ただ、私は買い物をしに帝都に来ただけで」

「そう。」

さてどうするべきか……。

このまま少女を解放したところで何か解決するわけではない。

それ以前にアークはこの少女に興味を持っていた（でも、どうしようかなー）

天を仰ぎ考えたそのとき。

「アーク！」

自分の名を呼ばれ、そちらを振り向くとそこには

「じこちゅあん……どうしてここにいる？」

「どうしても何も、お前がここまでたつても待ち合わせの場所に現れんから探しに来たんじゃい！」

「あ～、ごめん」

「ほれ、いくぞ！」

アークの祖父はアークの耳を引っ張り無理やり連れて行こうとした  
「いででで！ ちょっとまって！」

「なんじやー！」

祖父の言葉にアークは無言で少女を指差した。

「あの子は？」

「俺のツレ」

「どうこうことじや？」

祖父の言葉に、アークは笑顔で答えた。

「旅人みたいでさ。道中危険だらうからって一緒に来たんだ」

「ほう。それでどうするつもりだ？」

「腕には自信があるみたいだし、城のほうで置いてくれないかな？」

その言葉に祖父ははあと大きなため息をついた

「お前といい、あいつといい……帝都の軍は託児所じゃない」

「……は？」

「まあ、いい。とりあえずついてこい」

「？……うん」

アークは少女の手を引くと祖父の後について行つた。



第貳幕 玲

案内された部屋に一人きりにされたアークと少女  
少女は怪訝そうにアークを見つめた

「あんなあんなこといつていいの？」

「は？」

「私の腕とか……」

「君が普通の兵士以上に戦闘に特化しているのもう気づいている  
けど？」

「……っ！？ どうして？」

「身のこなしどか、纏っている雰囲気とかでだいたいわかるもんだ  
けど？」

「……あんた、ただ者じゃないわね」

「うん。よく言われる」

始終表裏のない二口一口とした笑顔の青年を少女は少し警戒しな  
がらみていた

「……そんなに警戒しないでよ。俺人畜無害な心優しい青年だよ」

「……本当に人畜無害な人は自分からそういうわないわ」

「手厳しいなあ。それより早く名前教えてくれたら、うれしいん  
だけど」

「え？」

「だから名前。いつまでも君とかお前とかじやいやだろ」

「……玲」

「レイ？」

「霧亞玲」

「キリア・レイ？ ……東国みたいにフアミワーネーム《苗字》が  
先なのか？」

「ええ。 私、あつちのほつの出身だから。」

「そりゃ。俺はアーク＝レー・シユ。 気軽にアークって呼んで  
……アークはどうして私をここまで連れて來たの？」

玲は率直に自分の疑問をぶつけた

「なんとなく放つておけなかつたから」

「ナニそれ？」

あきれたように玲は言った

「放つておけなかつたって……私そんなに非力じゃないわよ  
「じゃ、なんとなく運命的なものを感じたから、かな？」

「……そんなナンパはもう古いわよ」

「なんだよ、それ」

むつとした表情でアークは言った。

「本当になんか玲にそう言ったものをかんじたんだぞ  
「そう。」

頷いてみるも玲は全く信じていなかつた。

本当のことなになあ、とアークが呟いて見るも無視だ。

「……ところでフード暑くない？」

「別に、平気」

「名前まで言つたら素顔も見せてくれたつていいじゃないか！」

「勝手な男ね」

「せつかく助けてやつたのに」

「頼んでなんかいなわ」

「でも、そのままじゃ怪しまれるつて！ とれ」

ぐいとアークはマントを引っ張つて例からそれを奪つた。

フードの下の顔にアークは息をのんだ。

それほど、美しい少女だつたのだ

漆黒の黒髪は窓からこぼれる日の光を反射してわずかに青く輝く。  
真っ白い肌は肌荒れできもの一つなく、白く滑らかだ。

桜色の唇に、整つた鼻筋。

どれもが完璧な配置を施しており、まるで神が作った人形のよう。

何より目を引いたのは左右違う色の瞳。

右目が藍、左目が赤紫のオッドアイ。

大きな瞳はよほど自分の姿を見られたことが嫌なのかわざかにうるんでいる。

「……綺麗」

ぽつりとアークは玲に呟いた。

その声を聞き、目を見開いた

「な、何言っているのよアンタ！……大体の人間は人と違う私の姿を気持ち悪いっていうのに。異民族の私を嫌だつていうのに」

「なんだそれ？俺はきれいだと思うよ。まるで村の境界にあつた天使の絵みたいだ」

「なにそれ？」

少女は小さく笑った

「……お、やつと笑った。なんだ意外とかわいい顔もできるんだ」

その言葉に玲は顔を赤面させた。

「な、なにそれ？からかつてんの？」

「からかつてないって。それにもつたいないよ。せつかく美人でかわいいのに顔を隠すなんて」

「アンタバカ？オッドアイの人間なんて大抵が異民族。今帝国が鬪っているのは異民族たちが反旗を翻した反乱軍よ！」

「ああ、知っているよ」

アークはあっさりと答えた

「でも君は違うだろ？」

「あなたをだましているのかもしれないのに？」

「君が嘘をついているように見えないよ」

驚くほどきつぱりとアークは言つた。

そんな彼に玲は小さくバカじゃないのと呟いた。



## 第参幕 フィアール

アークは祖父に言われて少し広い部屋へと案内された。

玲はどうしようか？

祖父は自由にしていいといったので、アークは玲に声をかけたが、  
彼女は

「いかない」

そうきつぱりと言った。

どうやら、彼女は部屋を出たくないらしい。

あんな様子で玲は大丈夫なのだろうかと考えたが、本人からして  
みれば大きなお世話だらう。

それともう一つ。

廊下であった彼のこともアークには悩みの種だ。

「ラウ殿、その人は？」

祖父の後をついて言つていると一人の男に声をかけられた。

銀髪に赤い瞳を持つた長身の青年だ

「おお、フィアか。こいつは先日話しておったわしの孫じや」

祖父 ラウは簡単にアークの紹介をフィアと呼んだ男にした  
「ああ、君が……。私はフィアール＝リクロードだ。精々死な  
ないようにながんばってくれ」

それだけ言つと、フィアールはさつさとどこかへ行つてしまつた  
「やっぱり、まずかったかのう……」

小さくラウは咳いたが、アークに聞こえてはいなかつた。  
初対面で最悪な印象を持つた男 フィアールをじつと睨んで  
いたからだ。

ここにいるのがラメドのメンバーじゃ

ラウはアークに数枚の顔写真を見せた。

「この奴はフォンル＝リクロード。さつき廊下でそれ違った男

「ファイアの弟じや」

「ふんふん」

「いかつい男がジー・モン＝ベックアート、この女はサラ＝フロン、そして釣り田の男はレント＝サフィラン、軽そうな奴はクルト＝ファヴァ・レット・ジヤ」

「い、一日で覚えるのか？」

アークは彼らの大まかな特徴を書いた紙を見ながらラウに聞いた。

— そうじゃ。ラメビ

卷之三

日本語

だが、まあ仕方がない。

味方の顔を覚えて戦闘で不利になることはないだろう。

「まあ、覚えるしかないか」「

紙と写真を部屋に持つて行つてアーヴはそれをずっと眺めていた。

「なにそれ？」

「ラメドのメンバー」

「面白二の？」

「いやへりこ覚えていなへりかや」**レジ**「やせりへいけないんだよ」

「  
」

玲は興味なさそうに呴いた。

その間、彼女は自分の荷物の中から一冊の本を取り出した。

題名せ……

Utopia

それを見てアーヴは玲に聞いた

「なにそれ？」

「本」

「面白いの？」

「全然」

言つてから玲は本を投げてよこした。

その本は古代語で書かれていた。

「えーと何々？　“壱百の宝玉……樂園”？？」

「へえ、アンタ古代語が読めるんだ」

「少しならね。　でもよくわからない。……といひで壱百の宝玉  
つて何？」

「これよ」

玲は胸元から一つのペンドントを取り出した。

「ふつうは武器につけられている宝石。人の魔力を高めてくれる  
ものよ」

「……なんでそれと樂園が関係あるんだ？」

「樂園とは創造の力。　神の力のこと。　数年前までこれを奪い合  
つてゐる奴らがいたみたいだけど、反逆軍があちこち荒らしまわつ  
たせいで、宝玉の情報もかなり消失しちやつたみたい。　私だつて、  
本物はこれ以外見たことないもの」

そう言つて玲は苦笑した。

「何をしているアーク！作戦通り動け！」

「作戦通りにうごいてちや、相手に動きを読まれる一隙のない攻撃は次を読まれやすいんだよ」

「だからと言つて勝手に動くな！」

「仕方ないだろ！予定と敵の数が違つたんだから…」

「はっ、くだらない言い訳だ」

「なんだと！おい、フィア、表へ出ろ」

「ああ、受けて立とう…」

フィアとアークの言い合いでサラは小さくため息をついた。

「もう外に出ているわよ。」

彼女がそう言い終えたときにはもうすでに一人とも剣を抜いて、本気で撃ち合いをしていた

これが最近の風景となりつつある。

ラメドの駐屯所にアークが来てから、彼の剣の腕によつて戦闘は楽になつた。

だが、精神的なところで正直つかれる……

最初に会つたときから、一人の仲は良くなつた　いや、むしろ、悪かつた。

当たり前と言えば、当たり前だ。

炎の民の血を引くアーク。氷の魔女の末裔フィアール。

相対するその血により、一人の相性は最悪だつた。

それ以前にがむしゃらな熱血漢であるアークと、冷静なフィアールとでは、相性があまり良くないといつことば手に取るようになわかることで……

「……とにかく、何でラウさんは大丈夫なんですか？」

サラの言葉にラウは簡潔に答えた

「炎の民の血を引いておるのはわしの妻。あいつの祖母じやからな」

「ああ、なるほど」

……といった疑問が解けたところで「人の仲が良くなるわけではない。

とりあえず、フォンルはアークとそこまで仲が悪いわけではなかつたが……　彼はあまり先祖の血を濃く引いてはいないのだ

問題なのは、先祖返りと「うもので、氷の魔女の血を色濃く受け継いだフィアール。

サラがちらりと一人のほうを見ると炎と氷の力が互いにぶつかり合ってはきえて、水になり……を繰り返していた。

もう地面は雨上がりのようごぐしおぐしおだ。

「どうにかなりませんかね」

フィアールがはじいた火球をよけながらサラは言った。

「お互いがああじやから無理じやるうて」

今は耐えると言いながら、ラウはアークのよけた氷の刃を避ける。

「下手をすれば基地が壊滅します！」

泣き舌交じりにフィアの氷の刃をとかしたり、アークの炎をけしかりしているフォンはある意味一番の被害者だらう。

その姿を見ていられないというように頭を抱えるレントも然り。

「なにか、いい方法はないのだろうか?」

レントの言葉にサラはちいさく「あ」とつぶやいた。

「そうだわ。あの手があった！」

いいことを思いついたといつて、サラはフィアに言った。

「そんな事をしている暇があったら、セフィル君の相手してあげたら」

「ら~」

その言葉にフィアはピクリと反応すると、小さくため息をついた。

「ああ、そういえば最近、かまってやれなかつたな」

「あの子人見知りするから……あなたがいないと大体の人間にはまともに話もしてくれないのよ」

サラの言葉にフィアは頷くと、さつさとビニカへ立ち去つて行つた。

「……なんだ？」

首を傾げるアークに説明をしてくれたのはフォンだ。

「アークはまだ知らないんだね」

「？」

「兄さんは数ヶ月前にある子を拾つて、今まで面倒をみているんだ」

「……ある子」

「本名はわからない。記憶喪失みたいだからね」

「き、記憶喪失？」

アークは眼を見開いた

そんなアークに苦笑しながらフォンは頷く

「なんでも、戦争のショックで記憶をなくしたみたいなんだ。どこで生まれ育ったのかも、自分が何者なのかも覚えていない。そんな彼を兄さんは放つておけなかつたみたいで、ああやつて今まで面倒をみているんだ」

「……軍の人間が？」

「忙しいときは、別の人があ面倒みているし、なかなかしつかりした子で、負傷者の手当や食料の確保なんかを良く手伝つていてる」

人見知りをするのが玉にきずだけど

そう言ってフォンは笑つた。

「……根っからの仕事人間と思つていたけど、案外人らしいんだな」

アークの言葉にフォンは苦笑した



## 第五幕 約束

「……」アーク「か細い声に振り返るとそこには玲がいた。

「玲、どうしたんだ?」

「……あなたは、帝国軍で……反乱軍から自分たちを守るために戦つているのよね?」

玲の言葉にアークは頷いた

「ああ、そうだよ。それがどうかしたのか?」

「……」

玲は少し黙った。

どうやら、言葉を選んでいるらしい。

「反乱軍を倒すには……頭をたたくしかない。その方法を知つて」と言つたら、あなたはどうする?」

玲はまっすぐアークを見た。

アークは玲の言つてゐる意味がよくわからず、首をかしげる。

「……どういふこと?」

「だから、反乱軍を倒す方法を知つてゐるの。」

「誰が?」

「あたしが」

きつぱりと玲は言つた。

だが、その話の内容は理解しがたい内容で……

「初めてあつた時から不思議な子だと思つていたけど、あんたはなんなんだ?」

「あたしは……」

そこまでいつて玲はつまつた。

「あたしは、……」

「あたしは?」

アークが聞き返すが、玲は一向にしゃべらつとしない。

こうべきか言わないべきか迷っているのだ。

「いいたくないなら、無理に言わなくててもいいよ」

そう言つてアークは玲の頭をクシャリとなでてから笑つた。

「でも……」

「お前にはすべてを言つ義務なんてないんだ。 いつか、心の中が落ち着いたら話してほしい」

「……うん」

こくりと玲は頷いた。

「じゃあ、この話はおしまいな！」

「アーク、まつて」

立ち去ろうとしたアークを玲はあわてて止めた。

「あした、またここにきてくれる？」

「なんで？」

「連れて行きたい所があるの」

玲の言葉にアークは頷いた。

「ああ、いいよ。」

「絶対よ」

「わかつた、わかつた」

「わかつてない！」

軽い口調で言つたアークに玲はすねた子供のようなむつとした表情で言つた。

大人びた雰囲気を持つているから、今まで気にしてはいなかつたが、玲はまだ子供だ。だからだろうか？ アークは玲の年相応に子供子供とした仕草を見てどこか安心していた。

「アーク、何笑つているの？」

「いや、別に……」

言つも、アークはくすくすと笑つていて。

「また笑つた！ やつぱり、あたしの話聞いてないー馬鹿にしてる」

「してないしてない」

「してるとん」

してゐるもんつて。

意外とかわいい言い方をするなあと」アークは玲を見た。

「……絶対してゐる」

「してないよ。どうしたら信じてくれるかな?」

困ったように笑いながら、アークは考え、ある一つの方法を思いついた。

「玲、手えだして。」

「へ?」

おずおずと出された玲の手を取ると、アークは自分の小指と例の小指を絡めた

「指切り拳万嘘ついたら針千本飲～ます!」

そう言つて歌うアークの顔を玲は不思議そつに見ていた

「何これ?」

「は?」

「だから、何なの?」「コレ」

「玲、知らないの?」

アークの言葉に玲はこくじとつなぎいた。

子供扱いするなつて怒られるかと思つたけど、これはちょっと予想外……

尚もアークに先ほどの行為の意味を問ひ玲に説明した。

「これは……簡単にいえば約束の儀式みたいなものかな?」

「儀式?」

「そう。 約束事を絶対守るつて、誓いの儀式」

「へえ~」

子供のよく歌う童歌とは知らずに玲は一人、その誓いをアークがしたことに驚いていた。

「そんなことしていいの? 単なる口約束のつもりだったのに」「いいのいいの。おれは明日絶対ここに来る。だから玲も約束忘れるなよ。」

その言葉に玲は柔らかい笑みを浮かべてうなぎいた。



第陸幕 チカラ

翌日、アークは玲との約束を守り、約束の場所にきた。彼がくる前、すでにそこで待っていた玲は目を見開いた。

「まさか本当に来るなんて……」

そんな彼女の反応に、アークは大げさにため息をついて見せた。

「人を信用しろよ」

「……信用していないわけじゃないわ」

ただ、意外だっただけで。

そう続けた玲にアークは彼女に聞こえぬよう、つぶやいた。

それを信用していないつて言つんだよ……

「……なんか言つた？」

怪訝そうにこちらを見る玲にアークは「なんでもない」と首を横に振った。

「それより、玲は何をするつもりなんだ?」

アークの言葉に玲は宝玉を取り出すと、小声で呪文をつぶやいた。

「g t a r g n e e h a r r r o . j i r a

聞きなれない言葉。

ニコアンスすらまったく理解できないそれに首をかしげると、宝

玉が赤く光りだした。

だが、それもう3秒のことと、光はすぐにおさまった。

「……炎の力。さすが火の民つてことね。」

「は?」

アークが首をかしげると、玲は簡潔に説明した。

「いま、あなたの力を調べていたのよ。あなたに最もあつてている力は一体何かってね」

「なるほど」

「……で、なんで俺の力を調べるわけ?」

アークの疑問に玲は

「貴方がどの力にふさわしいか調べたかったの」と、答えた。

曰く、異民族たちを倒すにはそれ相応の力が必要。その力は数種類あつて、そのうちどの力がアークにあつているのか調べたらしい。

「私は水、アークは炎。違う力でよかつたわ」

「なんで？」

「同じ力だったら、弱点が多くなつてしまふから」

「なるほどね」

言つてはみたがあまりアークは理解していない。

それ以前に、なぜ玲は異民族の長を殺そうとするのか？

それが疑問だつた。

その疑問は遠くない未来にわかることだが、まだアークは気づいていなかつた。

これから先、つらい未来が待ち受けていることに……

誰かに呼ばれた氣がして、黒髪の少年は振り向いた。  
だが、長く続く廊下はしんと静まり返つて誰もいない。  
気のせいだろうと片づけて少年は包帯を持って廊下を走つた。  
けが人がたくさん出たそうだ。

戦争中だから仕方のないことだが、今回は特にひどい。

「大丈夫、かな？」

小さくつぶやいた少年に優しい声がかかる

『大丈夫ですよ、主』

背後には薄く体のすけた青年の姿。

一見して人間ではないことがわかる。

そう、彼は精霊だ。

少年につき従う青年は彼をとても大事に思つてゐる。それがよ

くわかるほど、彼の表情は柔らかい。

『さあ、仮を付けて……早く行きましょう? みんなが待っていますか?』

青年の言葉に少年は「うん」と頷くとたたたと小走りで廊下を進む。

彼の背中を見つめた青年は小さくつぶやいた

『……この生活が……あの子が笑って暮らせる世界が続きますよ

う』

祈りにも似た願い。

だが、青年の顔はどこか苦しそうだ。

『彼が、何も思いだしませんよ』

青年はそうつぶやくと手を合わせて扉を閉じる。

もう、彼が苦しみませんよ』……と。

## 第漆幕 子供

「あれ？」

アークは見慣れない姿を見つけて、思わずそれに近寄った。  
「どうして子どもがいるんだ？」

迷子かな？

と彼の目線になり話しかける。

だが、少年はおずおずとアークの姿を上田づかいに見上げるだけで、何も話さない

「……あう」

小さくなにかを呟いているが聞こえない。

どうしたものかと困って彼の姿を見ていると、あることに気が付いた

オッドアイ？

左右違う色の瞳。

よくよく少年の姿を見ると、誰かに似ていることが分かった。

なんだか玲に似ているような気がする……

他人の空似だろうか？と考えていると……

「セファイル……どこだ？」

いけ好かない声が聞こえてきたと同時に少年の顔が明るくなる。

「フィア将軍！」

「そこか？」

現れたのは思つた通り　　アークと仲の悪い男、フィアール。

「……貴様もそこにいるのか」

少年がフィアの陰に隠れた瞬間、彼はアークに『お前の顔なんか見たくない』オーラをぶつけてくる。

「なんだよ。俺は見慣れないやつ……子供がいるから話しかけただけだ。迷子かなつて思つてさ」

「そうか、だつたら早々に立ち去ることだな。　お前がいると不愉快

快だ

「お前の顔を見るなんて、最悪だ」

「それはこっちのセリフだ」

「ああ？ やるのか？」

アークが腰の剣に手をかける。

「望むところだ」

ファイアールが背の剣に手をかけ、二人は同時に抜刀した。ギイン

二つの鋼がぶつかり合い、火花が飛び散る。

二人の喧嘩におびえた少年はしばらくおろおろと成り行きを見て、自分ではどうにもできないと判断すると、人を呼びに行つた。

「あら、セフィイ君じゃない。どうしたの？」

一番近くにいて頼りになる人物 サラの元へ駆けつけた。

少年 セフィルはおずおずと彼女に向つて事の成り行きを話したが、元々話すこと自体が苦手である彼である。その上混乱しているのか話が支離滅裂だ。

サラは彼が何を言いないのか理解できずに首をかしげた。

「えーと、何があつたのか、も少しゆっくり話してみて？」

彼と同じ目線になり、優しく言うとセフィルはえーとと呟いてから、話した。

「あの、金髪の人に話しかけられて、ファイア将軍が来て……剣を抜いていました」

「ああ、なるほど。何があつたか理解できたわ。ありがとう」

サラはそう言つと、セフィルにそこへ案内してもらつた。

その惨状にサラは顔をひきつらせた。

キャンプをはつてゐる場所から100メートルほど離れた森の中だが……

木々は倒され、あちらこちらに焦げ跡が見える。

冬でもないのに樹氷が見える隣で、雷でも落ちたかのよつに黒く染まっている木がある。

サラは一旦脱力した。

「大丈夫ですか？」

「ええ、心配しないで」

11～2歳くらいの子供に心配されるなんて、私もまだまだねと心の中で呟いてからサラは大きく息を吸つて

「いい加減にしなさい！」

と、二人を一喝した。

驚き、一人が振り向いた先には、笑顔の裏に底知れない怒りを隠したサラ。

サラと一人の顔が青ざめる。

何を隠そうラメドのメンバーで怒らせると一番怖いのは彼女だ。

「一人とも、ちょっとそこへ並んで正座しなさい？」

そして、長々と説教されることとなつた。

その間にいつの間にかセフィルの姿が消えていたことに気づく者はいなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6335u/>

---

予言と運命の詩 炎の章

2011年12月25日13時46分発行